

シャルル・ペラと古文書学校：ペラ文庫に寄せて

岡崎， 敦
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/14685>

出版情報：貴重文物講習会．20，2009-05-22．九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：



第 20 回貴重文物講習会（2009 年 5 月 22 日、附属図書館視聴覚ホール）

「シャルル・ペラと古文書学校 ―ペラ文庫に寄せて―」

人文科学研究院 岡崎 敦

「シャルル・ペラ文庫」は、1979 年 3 月、九州大学が、文部省「大型コレクション購入経費」により購入し、中央図書館貴重書庫に収められたものである。『シャルル・ペラ文庫目録』（1981 年 3 月）によると、2848 点、約 3800 冊の規模を誇る。書籍のかたちをとるものの大多数は、旧所蔵主個人による豪華な装丁が施されおり、往時のヨーロッパの愛書家の姿を彷彿とさせる。

この文庫については、「ペラ文庫を語ることは、ペラ教授を語ることであり、さらに同教授自身を通じて、国立古文書学校を語ることである」（『目録』iii 頁）という、この文庫の当館への収蔵に関与された文学部の森洋教授（当時）の文章に尽きている。ここでは、シャルル・ペラとその業績、文庫の性格、ついで、彼の母校であり職場であった古文書学校を紹介したのち、最後に、フランスにおける図書館・文書館司書の養成について論じて、責をふさぎたい。

シャルル・ペラ Charles Perrat は、1899 年 1 月 14 日にリヨンで生まれた。父母の家系とも、同地の富裕なブルジョワ名望家である。戦役を終えたのち、1922 年に古文書学校に入学、26 年には同校を主席で卒業したのち、ただちにローマ留学を命じられた。帰国後は、パリの国立中央文書館 Archives nationales 前近代部門 section ancienne に勤務したが、古文書学校教授プルーの突然の死去による人事異動により、1931 年には母校に戻ることになる。37 年から制度史、53 年から古書体学担当教授を務め、1970 年に定年により同校を退職した。翌年にはレジオン＝ドヌール勲章を受けるなど、栄誉を極めたキャリアののち、1976 年病没した。

ペラの学問的業績のなかでもとりわけ重要なのは、古書体研究の刷新に寄与したことである。ローマの大文字からカロリング小文字への変容過程は、17 世紀以来、多くの碩学が取り組んだもっとも魅力あるテーマであったが、マロン、マリシャル、ペラのシャルティスト（古文書学校卒業生のこと）三人組は、書体変容過程を研究する方法論を根本的に変革した。とりわけ重要なのは、1928 年に初めて公に報告された「タブレット・アルベルティーニ Tablettes Albertini」と呼ばれる木製の板に書かれた 5 世紀末の文字の研究であり、1952 年に、総合的な研究の一部として公表された。

ペラ文庫は、ヨーロッパ史料学の精髓を極めた碩学の蔵書にふさわしい構成を呈示しており、研究者の蔵書が、その研究・教育を有機的なかたちで反映する典型的な姿を現しているといえる。ちなみに、同文庫には、上記の『タブレット・アルベルティーニ』が欠けている。これは、蔵書売り立ての最後の瞬間に、ご息女が父君の特別な思い出として抜き取ったためと伺ったことがある。九州大学貴重書庫では、この書物は、その後「クンケル文庫」所蔵の一部によって補われることになった。

国立古文書学校 Ecole nationale des Chartes とは、フランス独自の高等教育機関であるグラン・ゼコールの名門の一つである。厳しい入学試験によって選抜された 20 名程度の学生は、在学中から手当を支給され、卒業後は、フランスの文書館および図書館にお

ける指導的キャリアを保証されている。専門職であるばかりではなく、国家の最高レベルの政策決定に関与する高級官僚として養成され、そのようなキャリアを歩むわけである。1821年に創設されたが、現在まで続く体制が整ったのは29年の再編以後である。19世紀を通じて、国家文書館や重要な国家図書館のポストをほぼ独占するとともに、文書館・図書館行政においても大きな地位を占め続けた。とりわけ、革命時に設置され、固有の法に基づく文書館の領域においては、フォンの維持原則（1841年）や、公文書の文書館への移送原則、文書管理局の許可のない廃棄の禁止（1924年）など、近代的な制度の確立に決定的な役割を演じた。現用から廃棄のあらゆる段階を Archives として一括管理する体系は、英米系の比較的新しい記録管理の考え方とは一線を画しており、その現代的意義がますます見直されている。しかしながら、20世紀末に至って、フランスの文書館・図書館行政は大きく変容し、これに連動して、古文書学校の意義も再検討されるに至った。なにより、伝統的な「国家主義」が揺らぎ、国家予算の削減と民間活力導入が進む一方、業務と人材養成の多様化と国際化が要請されるという全般的な動向のなか、文書館・図書館司書養成についても、かつての古文書学校卒業生少数による独占状態が終焉を迎えるに至ったのである。

フランスにおける図書館・文書館司書養成は、ここ10数年で根本的に変容した。文書館領域においては、新たに国立文化財機構 Institut national du patrimoine が設けられ、2008年以後は、その文書館司書部門が、古文書学校卒業生以外にも開放された。図書館については、1992年に設立された国立図書館情報学学校 nationale supérieure des sciences de l'information et des bibliothèques がすべてのレベルの図書館職養成に責任を持っている。その最高レベルに位置する国家司書 Conservateur d'Etat 養成についても、古文書学校卒業生は、現在もはや、定員の約三分の二の割当を確保するにすぎない。

フランスにおける文書館・図書館司書は、依然として、最高レベルの国家官僚として養成されるシステムが維持されている。このレベルでは、かつては古文書学校卒業生に独占的な地位が保証されていたが、これは、現在、制度的には急速に空洞化している最中と言えよう。他方、伝統的に古文書学校で受け継がれていたのは、史料学や資料管理の方法論の体系であり、その専門家として誇りと自負が、それを裏付ける学問的素養とともに、シャルティストたちの間で維持されてきた。ところで、史料学と資料管理とは、テキストの中味ではなく、そのかたちと「群」としての資料のあり方への関心という点で、本質的な類似性を有しており、この両者が密接不可分なかたちで関係づけられてきたことは、それなりの意味を有すると考えられる。

他方、現在進行している英米モデルによる日本の制度改革については、あえてフランスの経験の重要性を強調したい。伝統的に国家の関与が弱く、民間のヴォランティアズムに活動の基礎を置いてきた英米流の運用手続きよりも、国家制度の大きな役割を維持しながらも、急速な変容を蒙っている大陸ヨーロッパ、とりわけフランスの現状は、日本の、とりわけ国立機関のあり方を考える場合には、むしろ適合的と考えられる。とりわけ、多くの文化財を収める教育・研究機関である大学図書館に関しては、フランスの国家制度と古文書学校の果たして来た役割は、特別な価値を持つように思われる。

最後に、大学の蔵書や収蔵物は、その研究・教育のあり方を有機的に表すという意味で、

学者の個人蔵書と共通する性格を有する。九州大学図書館とは何かが問われる場合、フローの情報処理のみならず、そこに何が蓄積されているのかもまた、（単なる過去の遺産ではなく）大学自体の有機的な活動のあり方を表現するという意味で、大きな意義を有すると思われる。